

第 5 章 今後の課題

5-1 維持管理手法の検討

当該道路陥没のメカニズムが判明したことから、再発防止に向けた取り組みとして、今後の横断管の維持管理手法について、技術検討会委員から以下の助言があった。

- ・ 道内の排水施設の数や位置を、過去の資料も含めて把握する必要がある。
- ・ 特に、水の流れがある所の盛土には十分留意すること。沢筋部であれば、必ず何らかの水の流れがあるはずという視点で点検する必要がある。
- ・ 道内の盛土箇所や排水施設の数には膨大であるため、全てを点検するには莫大なコストが掛かる。そのため、効率的でポイントを絞った点検方法を検討すること。
- ・ 点検は目視確認を基本とし、点検記録を作成すること。また、ルーチンワークとして数年に一度点検し、継続的に記録を残すこと。
- ・ 豪雨時には、平時に確認出来ない現象や異常出水等が起こり得る。そのため、豪雨後に点検を実施し、呑口部の滞水および滞水の痕跡の有無、吐口からの排水の健全性や管内閉塞があった可能性を示唆する大量の流出土砂の有無を目視確認することが望ましい。
- ・ 路面沈下については、軟弱地盤の有無に起因する不同沈下の可能性もあり、変状発生タイミングや恒常性などにも着目しながら空洞形成の可能性を検討しなければならない。
- ・ 現場での詳細調査で空洞を確認した場合、空洞形成の原因を可能な限り把握、推察し、それに応じた対応が求められる。そのためには、点検記録や各出張所において対応した維持管理記録等を残してゆくこと。その際、急激に変状が進んだケース等があれば、直ちに専門技術者による現地確認を実施し、対応方針を協議することが望ましい。